

# 淑徳大学アーカイブズ・ニュース

vol.30

2026.3.30

## 目次

大乘淑徳学園長谷川良信記念館	1
所長挨拶	2
～表紙の写真について～	2
アーカイブズの活動紹介	3
卒業生が語る長谷川良信	4
見学記	5
アーカイブズ力をつける その8	9
アーカイブズ事務室だより／ご協力のお願い／編集後記	12



## アーカイブズ所長挨拶

長谷川 匡俊



淑徳大学 アーカイブズの活動に、日頃からご協力いただき、誠にありがとうございます。

アーカイブズでは開設以来、毎年アーカイブズ・ニュースを発信してまいりました。当初は年2冊で刊行し、現在は年1冊ずつのペースで刊行しております。折を見て、また年2冊のペースに戻せればと思っております。

さて、『アーカイブズ・ニュース』では、アーカイブズの活動について、折々の活動の様子を振り返りつつ発信することに加え、アーカイブズを理解するためのいくつかの文章を掲載しております。最近では、毎回卒業生に関わる原稿を、卒業生にご協力いただき、掲載しております。ご協力いただいております皆様に感謝申し上げます。

また「アーカイブズ力をつける」として、アーカイブズを理解するための具体例を示してお読みいただいております。こちらは、書籍として刊行する準備を進めております。

資料の構築をはじめとするアーカイブズの活動は、学内の一部署のみで完結する活動ではありません。教職員だけでなく様々な方々のご協力が欠かせません。将来に向けて、引き続きご協力の程お願いいたします。

## ～表紙の写真について～

大乘淑徳学園長谷川良信記念館

表紙写真の「大乘淑徳学園長谷川良信記念館」は令和8年6月に開館予定です。現在、展示の準備を進めており、淑徳大学アーカイブズも業務の一環として協力しております。

本学の創立者である学祖・長谷川良信は、皆様ご存じの通り、社会事業や教育活動に多大な功績を残されています。生涯にわたる活動の軌跡を後世に伝えるための拠点として、記念館の活動が始まります。

長谷川良信の活動に関わる資料のほか、仏教社会事業に関する文献等を収集・保存し、展示を通して広く公開するとともに、地域に開かれた生涯学習の場としても活動します。

地上2階建ての建物は、長谷川良信が創立したマハヤナ学園の跡地である東京都豊島区西巣鴨(淑徳巣鴨中学・高等学校第二体育館隣接地)の閑静な住宅地に建設されました(豊島区西巣鴨2-36-18)。

床石には先生のゆかりの地の一つである出生の地、茨城県笠間市の稲田石を施しています。講義・講演にも使用できるホールと、その奥には、長谷川良信先生の思想や生涯をたどる展示コーナーが設置されます。

開館にあたり、多くの教職員の皆様よりご協力を賜りましたこと、お礼を申し上げます。開館の折には、ぜひ展示室の見学にお運びいただけますようお願い申し上げます。

(写真は、落慶式の折に撮影された写真です。写真提供は学園本部)

## アーカイブズの活動紹介

事務室は、千葉キャンパス1号館の校庭側3階です。学内の教職員に加え、学園の皆様、学外の関係者の方々にご協力いただきながら連携して、職務を進めております。アーカイブズ事務室の活動についてご紹介します。

### 資料調査

今年度は、大念寺(茨城県稲敷市)で古文書調査を5月17日に実施しました。調査にあたり大念寺の御住職古矢智照様はじめ関係の皆様にも今年も大変お世話になりました。



### アーカイブズ叢書の刊行

アーカイブズ叢書14を刊行しました。茨城県那珂市の関東十八檀林の常福寺に所蔵されております『常福寺類聚』を翻刻し、今回が最終巻となるため、解題を付しました。

### 宝物殿の協力

業務のひとつとして、大巖寺宝物殿の開館日(毎月火・土曜各1回)に協力しています。

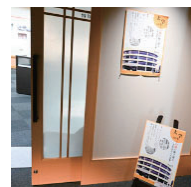
### 古文書ボランティアの活動

古文書ボランティアは、毎月2回金曜日に古文書の読解作業(大念寺文書)を進めています。今年度は展示準備にも協力いただきました。



## 特別展示室「大学60年、あの時を振り返る—主人公たちの青春—Part1」

学生の活動の痕跡を伝える資料は、心していなければ残りにくく、学生目線の資料を将来に引き継いでいくことで、大学の歴史の重要な証となります。こうした資料に注目するためにも、学生が残した資料でこれまでに寄贈されたものの中から展示を行いました。



会期は2025年10月25日～12月12日、2026年度は5月14日～30日まで通常開室いたします。展示場所は1号館3階の特別展示室、開室は10:30～16:30です。

### 階段アート

1号館4階の展示室への導入として、階段アートを設置しました。榎英子先生のご協力を賜り、附属機関事務室アジア国際社会福祉研究所事務職員の協力で短時間で設置ができました。



### 見学

毎年、4・5月頃には、ゼミ、時には学年単位で、展示室にご来室いただいております。毎年必ず見学の予定をたてているゼミもあります。また夏の教職員の大巖寺研修やマハヤナ学園の大巖寺研修のときにも展示室を開室するほか、一般の方の見学も受け入れています。

見学は、4階の学祖展示室・3階の吉田久一展示室(常設展)・アーカイブズ特別展示室の3室を一緒にご見学いただくことをお勧めしています。見学をご希望の方は、事務室までご連絡ください。



## 卒業生湯浅道夫さん(1期生)が語る

### 長谷川良信

今回は、1期生の湯浅道夫さんが2007年(平成17)に「長谷川良信先生の思想と生涯」の授業で語られたことをご紹介します。

当時は、長谷川良信先生から話を聞く接心会という授業が月に一回あり、そのなかで「学祖の思いが今も重く残っている」と自覚されています。学祖の思いがどのようなものであったか学生たちに伝えたいとして、具体的に話をされました。

福祉は実学です。1年生の夏休み実習で施設に行き、実習を行うことの重要性を身にしみを感じたといいます。そして施設では、「させていただくという意識」を痛切に感じたと言います。

そして、在学中のサークル活動(新聞部)がその後の人生で役に立ったこと、1期生として大学を作る際に、学生が求めることと学校側が求めることは違うと感じ、学生会を立ち上げたことも話されています。また全国社会保障ゼミナールでの交流が、研究方法を学ぶ上で役立ったこと、学園祭での活動も、地域に開かれたイベントを行うときに役に立ったことを思い返されています。

1期生は少人数であったことや、個性豊かな同級生と4年間一緒に学んだことに触れています。

湯浅さん自身は、彼のためにではなく、彼とともに生きるという、長谷川良信先生の考え方に通底する若月俊一先生と出会いました。若月先生は、「病院のなかに農民がいるのではなく、農民のなかに病院がある」「農民とと

もに」と唱えた農村医療のモデルにもなった佐久総合病院に勤務されていました。この病院は、健康管理部がいち早く作られ、湯浅さんは、この健康管理部で26年勤め上げました。

講義時間の大半は、若月先生の活動(農民のために出張診療されたことや、農薬の薬害に関する活動)を紹介されましたが、それは長谷川先生の活動にもつながることでした。

地域活動を進める上でのコーディネートを行うには、3つの条件があると言っています。長谷川先生のように、如何に燃えるような情熱をもって活動できるのか、企画力・総合力を発揮する燃えるような研究心があるか、3つ目にしっかりとした体力があるかを挙げています。体力が無ければ、本当に地域で役立ついい仕事はできないと考える、と力説されました。

湯浅さんは退職後、ケアマネージャーとして活動され、何歳まで仕事をするかは、地域の住民が決めることと言い切っています。また、人間は真面目な側面と、笑いを受け止める力が大事な点とも話され、宗教の役割の重要性や同窓会の役割の重要性についても触れられて、講義を終えました。

湯浅さんには、淑徳大学アーカイブズに資料を寄贈いただいたり、折々に通信をお送りいただいたりしました。また1期生の座談会にも参加くださり、活動に大変御協力いただきました。

誠に残念ではございますが、湯浅さんは昨年2025年5月にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(湯浅道夫さん略歴)

1946年生まれ。1974年より佐久総合病院、1988年より小諸厚生病院に勤務。2020年からはJAでケアマネージャーとして活躍。

## 見学記

### 淑徳大学アーカイブズ特別展

#### 「メッセージの歴史」

ー広報誌にみる学園・大学の歴史」紹介

飯塚 彬

2025年8月4日(月)、筆者は、淑徳大学アーカイブズを初めて訪問させていただいた。

隣接地には、関東十八檀林の一翼を担った浄土宗寺院「大巖寺」(創建は天文年間と伝わる)がある閑静な地である。淑徳大学創立者の長谷川良信氏(現在の茨城県笠間市生まれ 1890~1966年)が住職をしていた関係上、今でも両者は密接な関わりがある。

\* \* \* \* \*

ところで、淑徳大学アーカイブズは、「大学および学園の事務文書で保存期限が切れた文書のうち歴史的に重要な文書」や「大学および学園の諸部署が作成、発行した印刷物や刊行物」(大学HPより引用)などを残し、後世に伝えていく「大学アーカイブズ」である。

大学アーカイブズ自体の研究も大いに進展していることは今更、言を俟たないが、例えば森本祥子氏(東京大学文書館)の言葉をお借りすれば、「大学という存在の全体」を見渡し、その姿を捉えたうえで、今の大学の姿を後世に総合的に伝えていく資料を集め、保存することを目指す場所としての意味

を持つものである(『東京大学総合研究博物館ニュース』Volume18 Number1)。

\* \* \* \* \*

そうして考えていくと、今回の展示は、まさしく「広報誌」という媒体(刊行物)が、大学という存在を伝える貴重なアーカイブズの一つを担うものとしての役割を内外に示す、コンパクトながらメッセージ性の強い展示であるといえる。

淑徳大学を運営する大乘淑徳学園が創立されてから、75年という節目の年(2024年)にあたるという時期にふさわしい特別展である(展示は2024年10月26日~11月30日のI期、翌2025年5月15日~6月30日の第II期にわかれる)。

「大学アーカイブズ」の根幹に関わる貴重な展示を拝観させていただいたお礼を込めて、以下、紹介と若干の感想を記しておきたい。

\* \* \* \* \*

展示の最初の「ごあいさつ」では、大乘淑徳学園および「大学アーカイブズ」の視点から傘



下の淑徳大学の広報活動の歩みを振り返ること、同時に広報活動の変遷という基軸から学園と大学の歴史に目を向けていくことが述べられている。

全体の構成としては、「学園・大学広報誌発行表」(1959～2024年)を皮切りに、「Ⅰ広報誌の刊行」「Ⅱ学祖の発信力」「Ⅲ広報誌のいま」の三部構成となっている。

なお、取り上げられている広報誌は図録掲載順に『淑徳タイムス』(1947～1950年)、『マハヤナシュクトクタイムス』(1959～1962年)、『大乘淑徳タイムス』(1962～1969年)、『学園内報』(1966～1987年)、『学園だより』(1987～1993年)、『学園内報』(1993～1995年)、『News Letter』(1996～2003年)、『CUE[キュー]』(1985～1992年)、『CIニュース』(1989～1992年)、『淑徳広報』(1987～2003年)、『淑徳大学広報』(1967～2007年)、『Together』(淑徳大学広報の愛称として、2007年に決定。現在も刊行)、『With[ウィズ]』(2021年5月～現在までウェブコンテンツ)となっている。

\* \* \* \* \*

「Ⅰ広報誌の刊行」は、淑徳大学が創立される以前から続く、広報誌からみる学園および大学の歩みを知らせる。

1947年(昭和22)の戦後まもなく創刊された『淑徳タイムス』は、その「創立記念号に寄せて」(学祖・長谷川氏の筆)にて「明治二十五年輪島聞声尼によって創設されてからここに歳

月を経ること五十五年」になるという「我が淑徳学園」(東京の小石川に当初設立)のこの時点での歩みを端的にまとめている。

大乘淑徳学園の起源は、女子教育の発展のために、輪島が東京に設立した「淑徳女学校」(小石川傳通院内。戦後、校舎全焼につき板橋に移転、現在の淑徳中学校・高等学校の前身)にまで遡ることが出来るようである。

輪島が学園発展の礎とするため、自身の考えを広めるため「淑徳婦人会」を結成し「阿弥陀経」の訓読や、「名士の講演」を開いていたことが、大乘淑徳学園発足の源流の一つとしてあるようである。

\* \* \* \* \*



この輪島聞声(北海道松前生まれの浄土宗尼僧 1852～1920年)は、のちに淑徳中学・高等学校の第8代校長になられた長谷川氏の言葉を借りれば、次のような人物であったとされる(「Ⅱ学祖の発信力」より)。少々、長文だが、幕末から明治初期という時代の移り変わりの中で、特に女性が置かれた位置がよく分かるため、ここに引用する。

「本校の学祖たる輪島聞声先生は北海道松前町に四代続いた質屋の輪島家に幕末に生まれた女性であります。父君は、当時ロシアのプチャーチンが北海道や樺太に野心を抱き、幕府の外交官をてこずらせたのを見て、町人とはいえ、憤然、同志と相図り活動したので幕府からにらまれ投獄されたが、藩主伊達公からはその功を賞せられ、姓を輪島と名乗るのを許されたほどの憂国の士でありました。松前町には、大鳥圭介、榎本武揚等の兵がなだれ込み、一夜にして両軍の激突で死屍るゐるいたる光景を呈しました。先生がか弱い乙女の初願で、諸霊を慰めたいと決意し、父に伴われて函館から海路横浜に上陸し、当時開通したばかりの鉄道で入京し、両国の回向院に居られた福田行誠先生(浄土宗僧侶)ー当時の宗教界の大立者で明治天皇にもご進講ーに見出されて得道しました。(中略)同窓の男僧は各宗の管長や一宗の重鎮としてゆかれましたが、わが輪島先生は、当時の日本の女性がみじめな境遇におかれ、またその教育が、わずかにミッションスクールに左右されているのを慨し東西に尼衆教室を創立し、他面、一般女性の教育機関を開拓せんとの悲願で、(中略)わが淑徳校を建てられ・・・」(『マハヤナシュクトクタイムス』第4号 特輯号 1959年11月7日)

幕末から明治初年にかけての戊辰戦争最後の戦いの中での輪島家の位置、そして、明治以降、神仏分離、国家神道化による仏教界の激動、何より「男系」が重視される明治期において、女性の僧侶という当時としては特殊な立ち位置において、時代を生き抜いた力強さを知ることができよう。

\* \* \* \* \*



同時に、その跡を継がれた長谷川氏自身が語る「淑徳」の理念も広報誌は知らせる。

「由来、我が学園の女子教育の主張と信条は『大乘淑徳』の四字につきる。それは人間なるものが放っておけば動物に近い欲望の奴隷であるという人間観、即ち聖徳太子の「すべて是れ凡夫のみ」法然上人の「煩惱具足の凡夫」であるということは間違いない。それだからこそただ「信仰」「信仏」によってのみ、ただの動物でない真実の人生を全うし得る人道主義者(ヒューマニスト)、仏教的に言えば、すべての人間を菩薩行者たらしめたいと願っている」(『大乘淑徳タイムス』第36号 1963年11月25日)

「煩惱具足の凡夫」は、法然の弟子として、のちに浄土真宗の開祖となる親鸞にも大きな影響を与えた考えと言われているが、長い年月を経て、近代にも受け継がれていたのである。長谷川氏の言葉はそれを伝えている。

なお、「大乘」とはサンスクリット語で「マハヤナ」であり、他者を救済するために自ら「仏」になることを目指す偉大な教え、という意味であるという。

こうした情報は、大学の創立者であるから

こそ語れる部分であり、それらが掲載された  
広報誌からしか、知ることは出来ない情報で  
ある。こうした媒体はまさしく貴重な「大学アー  
カイブズ」である。

\* \* \* \* \*

そして、最後の「Ⅲ広報誌のいま」では、学  
園の創立者輪島の思いを次代に継ぎ、大乘  
淑徳学園ならびに淑徳大学を創立した長谷  
川氏の「足跡」を、現代でも広報誌  
（『Together』）に掲載して伝えていることも  
紹介されている。

\* \* \* \* \*

広報誌から分かることが多い反面で、ただ  
展示ではそれだけに及ばず、長谷川氏自身が  
広報誌の作成にあたって直に朱入れや書き込  
みを施していた原稿などの展示もあり、社会  
事業家として以外の、新聞記者も務めていた  
とされる長谷川氏の別側面（『万朝報』記者）  
も類推させる構成となっている。

歴史学を専攻する筆者としては、むしろこう  
した史料を直にひもとしてみたいと感じた。ほ  
か、もっとも興味をそそられたのは、同氏が生  
前に身に付けておられたという実物資料の展  
示である（図録にはこれらは掲載されていな  
い）。

\* \* \* \* \*

展示の最後の部分にあった長谷川氏が身  
に付けておられた燕尾服の展示では、折れた  
マッチがそのポケットに入っていることが紹介

されていた。

人によっては、それは「ゴミ」として捨てられ  
かねないマッチでしかないが、それが残ってい  
るか／残っていないかでは、実は大きな違い  
がある。



記録（アーカイブズ）を残すのは、いつの世  
も人間であり、少しでも記録（それは文書であ  
れ、「モノ」であれ）が残ってさえいれば、そこ  
から研究につなげることも出来れば、その人  
物像を追跡することも出来るのである。

長谷川氏自身も無意識に残したであろうか  
すかな痕跡から、人柄を類推させ、それを重  
要なアーカイブとして位置つけて展示する  
というのは多分に挑戦的であり、示唆的であ  
ると感じた。

\* \* \* \* \*

学園、大学創立の歩みを広報誌から探る、  
という記念の展示だが、それ以上に学祖の歩  
みを通してアーカイブズの意味を知る、とい  
う大きなテーマをも伴った展示であった。

展示にご尽力されたスタッフの方がたに敬  
意を表し、紹介とする。

## アーカイブズ力<sup>りょく</sup>をつける

その8

デジタルアーカイブについて

清水 邦俊

今回は、デジタルアーカイブについてお話しします。

1990年代から2000年代にかけて、インターネットが普及したこともあり、資料画像をデジタル化して公開することが求められてきました。いわゆる、デジタルアーカイブというものです。

デジタルアーカイブはいくつかのタイプがありますので、簡単に紹介します。

\* \* \* \* \*

一つ目は、自館が所蔵している書籍や歴史的資料等を公開しているというタイプです。

例としては、国立国会図書館のデジタルコレクションがあります。このサイトは自館が所蔵している歴史的資料や著作権の保護期間が失効した古い書籍等を公開しています。古い書籍をインターネットで読めることは便利です。

アーカイブズ機関でも、自館が所蔵している資料や目録等を公開するという、このタイプのデジタルアーカイブが多いと思います。

\* \* \* \* \*

二つ目は、他館が所蔵している資料をデジタル化し、それを公開しているタイプです。

例としては、立命館大学にあるアート・リサ

ーチセンターやアジア歴史資料センターをあげることができます。

立命館大学のアート・リサーチセンターは、歴史資料だけではなく、美術・芸能・工芸といった有形・無形の人類文化財を歴史的・社会的観点から調査・研究する機関で、日本国内や海外に所在する資料をデジタル化し、公開しています。

アジア歴史資料センターは、国立公文書館が管轄し、インターネット上のみで閲覧できる機関です。

目的は、外務省外交史料館や防衛省防衛研究所が所蔵している、近現代における日本とアジア近隣諸国等との関係に関わる日本国内の歴史的文書をデジタル画像で公開することである。

アート・リサーチセンターやアジア歴史資料センターともに、他館が収蔵している資料をデジタル化し、公開しているという点は同じで、いわばプラットフォーム型デジタルアーカイブということができます。

\* \* \* \* \*

また、東京都港区虎ノ門にある領土・主権展示館は、資料をデジタルで収集し、それらを館内の展示やサイト上の年表のデータベース欄に活用しています。

この館の目的は、北方領土・竹島・尖閣諸島が、日本の固有の領土であることを、アーカイブズ資料を用いて展示し、これまでの歴史的背景を国民に広く知ってもらうことです。

同館は、展示にもデジタル化した他館所蔵の資料を利用しているプラットフォーム型といえるでしょう。

ここまでのデジタルアーカイブは、他館所蔵

の資料をデジタル化し、その画像の記載内容を提供すること、画像から資料内容の可読を目的としたものです。

\* \* \* \* \*

一方、国立歴史民俗博物館のWEBギャラリーでは、上記に挙げたプラットフォーム型デジタルアーカイブとは異なり、自館で所蔵している資料は、高画質で撮影した画像をインターネット上で見ることができるデジタルアーカイブになります。

興味深いのは、屏風・絵図・絵巻・絵画を高画質で撮影したことにより、ある一部分を拡大することで肉眼では見えなかったところまで見えるようになっています。

例えば、室町時代に作成された屏風「洛中洛外図（歴博甲本）」を拡大して見ていくと、京都の街中を歩き交う人々の表情や持ち物、着物の柄、建物の作りや屋内の様子等までがはっきりと見えます。

当時の風俗を研究している人にとっては、デジタル化によって得られることが可能になった重要な情報といえるでしょう。

このように、肉眼では見えなかった、見えにくかったものが鮮明に見えるようになることは、デジタルアーカイブの利点の一つだと思います。

\* \* \* \* \*

ここまで読むとデジタル化は、素晴らしいもの、時代の流れに即しているものと思うかもしれませんが。

しかし、デジタル化する上で、あまり知られていない言葉に「デジタルブラックホール」とい

うものがあります。

近年では電子媒体が古くなると、そこから情報が引き出すことができなくなる、という意味も加わっているようです。

本来は、デジタル化したら、そのデータを閲覧するためのソフトやOS・保存している媒体等は、数年単位でバージョンアップしていくため、それに伴い関係機器もバージョンアップしていかなければならず、それにかかる費用が宇宙のブラックホールに吸い込まれていくようであること、という意味です。

デジタル化するには、長期的な費用まで考慮する必要があります。

\* \* \* \* \*

他方、私がサンパウロに在住中の2018年に、サンパウロ州立公文書館を見学する機会がありました。

整理や補修といった各部門の部屋を見せていただき、そのなかに資料撮影室がありました。文書資料をマイクロフィルムに撮影する部屋です。

マイクロフィルムは、馴染みのない方もいると思いますが、簡単に言うとリール状になった白黒の写真フィルムです。日本では、メーカーがマイクロフィルムを生産しなくなってきて、新規のフィルム化は厳しい状況にあります。

しかし、サンパウロの公文書館は、マイクロフィルムで資料を撮影し、それを閲覧に供しています。



担当者に、なぜデジタル化しないのかと質問したら、デジタル化は費用がかかるし、データ管理上、消失の恐れがあり、不安要素が多いため、とのことでした。

\* \* \* \* \*

現在の日本において、マイクロフィルムで対応するという状況は難しいですが、デジタル化するにしても、途中で計画を変更できる、あるいは深入りしないことが重要だと思います。

具体的な対策としては、デジタル化したからといって原本を処分しないこと、重要資料・利用頻度が多い資料のみをデジタル化することで、費用を制御する等です。

デジタル化したからという理由で原本を処分すると、デジタルデータが唯一のデータとなり、それを常に閲覧できる状態にしておかねばならないため、バージョンアップのたびに費用がかかり、それこそブラックホールへ墜ちていくことになります。

\* \* \* \* \*



また注意点としては、これからデジタル化して資料を公開したいという機関によくあることですが、デジタル化することが、目的になってしまうことです。

デジタル化は、あくまでも資料そのものに直接あたらずに内容を可視できるようにしたものです。いわばデジタル化は代替物であり、デジタルアーカイブは利活用のための一つの手段(方法)にすぎません。

何を目的としてデジタル化し公開したいのか、計画段階で明確にすることが重要だと考えます。

今回は、文書の破損、補修、資料レスキューなどについてお話します。

清水 邦俊(しみず くにとし)

認証アーキビスト。國學院大學卒業後、千葉県文書館や高知県の土佐山内家宝物資料館(現、高知城歴史博物館)にて古文書の整理に従事。2018年からJICA日系社会ニア協力隊に参画。ブラジルのサンパウロ市にあるサンパウロ人文科学研究所にて日本人移住者や日系人が残した個人資料の整理に携わる。帰国後、高知市民図書館、国土館史資料室を経て、2025年より秩父宮記念スポーツ博物館にて勤務する。



淑徳大学アーカイブズ叢書には、翻刻メンバーとして関わっている。

## アーカイブズ事務室だより

事務室活動記録 (2025年1月～2025年12月)

○資料寄贈等(寄贈順) : 大久保功氏・細谷昭夫氏・大学改革室・白井伊津子氏・地域共生センター・千葉キャンパス・松園祐子氏・NPO法人ちば生浜歴史調査会・長谷川匡俊氏・伊藤友治氏・成田真美氏・千葉キャンパス総務・森本亮子氏・東京キャンパス総務・千葉学生サポートセンター・千葉第二キャンパス・鈴木日出夫氏・埼玉キャンパス・千葉サービスラーニングセンター・淑徳大学短期大学部

○聞き取り協力者 : 大久保功氏、小野寺俊幸氏、川眞田喜代子氏、武田逸朗氏、西塚洋氏、長谷川匡俊氏、細谷昭夫氏、

○資料貸出 : 淑徳巣鴨中学高等学校

○資料調査(アーカイブズ叢書) : 大念寺(5/17、5名)、常福寺(5/27、4名)

○アーカイブズ記録表の作成(本部と連携、巡回)は、本年度は与野中高・幼稚園8/25、巣鴨中高8/29、大学東京キャンパス9/1、千葉・千葉第二キャンパス9/4、埼玉キャンパス9/18の順に実施、ご協力いただきました。

○大巖寺宝物殿開館支援協力 : 1/14,1/25,2/8,2/18,4/12,4/22,5/13,5/24,6/3,6/28,7/29,8/5,8/23,9/2,9/20,10/14,10/25,10/26,10/29,11/11,11/22,12/2,ほかに開館協力は全教員会3/29、9/6。大巖寺研修8/27、12/3。

○協力 : 長谷川良信記念館展示準備、淑徳中学校・高等学校パネル展示

○長谷川良信記念館 : 設置運営室会議(4/24、6/25、9/25、10/30、11/27)、顧問ミーティング第9～16回(4/16、5/28、6/24、7/23、8/19、9/3、9/24、11/18)、館長インタビュー撮影 10/15

○産業現場実習受け入れ : 市原特別支援学校鶴舞分校(10/6～10/7)

○視察 : 千葉県文書館(4/18)、明德学園「明德館」(11/15)、

○特別展 : 「メッセージの歴史—広報誌にみる学園・大学の歴史—」(後期5/15～6/30)、「大学60年、あの時を振り返る—主人公たちの青春—Part1」(前期10/25～12/12)

○刊行物 : 『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第29号(3/10刊行)

○古文書ボランティア : 224回～242回

○アーカイブズ運営委員会 : 9/8 学園本部〈ご協力のお願ひ〉

\*各部署で個別に廃棄の状況が生じた書類等は、アーカイブズ事務室へご相談ください。

\*各部門・部署で刊行された冊子などは、年史を編纂するときや、振り返るときに必ず役立ちます。データでの寄贈も可能ですので、PDFがございましたらご協力下さい。

〈編集後記〉

日頃は、アーカイブズ事務室の活動にご協力いただきありがとうございます。このたび、アーカイブズ・ニュースも30号を迎え、所長挨拶を冒頭に掲載いたしました。今回の卒業生からの寄稿は、故湯浅道夫さんの講義を元に構成しています。特別展の見学記も掲載いたしました。毎回の「アーカイブズ力をつける」も身近な話題です。関連して、アーカイブズの思想を身近に置いていただく書籍も近々にお手元へお届けします。引き続きご協力の程、お願いいたします。

(大寫 聖子)

[編集協力 永野淳子]

淑徳大学アーカイブズ・ニュース 第30号

令和8年(2026)3月30日 発行

淑徳大学アーカイブズ



〒260-8701

千葉市中央区大巖寺町200 1号館3階

TEL 043(265)7526 <直通>

メールアドレス archives@soc.shukutoku.ac.jp